

白山麓 白峰村

― 高度経済成長への対応 ―

矢ヶ崎 孝 雄

はしがき

わが国において、山村とは、一般に林業資源をはじめとして山地資源に依存し、食料自給不能の山地の村といわれてきた^{①②}。そして山村は通常交通不便な地域で、隔絶性の濃い僻遠な地域であり、後進地域とされてもきた。しかし、山村民はあくまで地元に残り、生産基盤の拡充と交通の近代化を求め、地域格差の是正を祈念してやまなかつた。ところが、交通の近代化は特定の山村を除いては実現しないのが普通であった^③。それにもかかわらず、山村には一定の人口が定着し、一応安定した村落を形成持続してきたのである。

かような傾向は、周知の通り、一九六〇年頃より顕著になってきたわが国の高度経済成長により、著しい変化・変質を生ずるに至った。山村民が多年切望してきた交通の近代化は、多くの山村地域で実現した。しかし、交通の近代化と歩調を合せて、これまで持続してきた山村の経済を改変、衰退に導き、その結果は著しい人口の流出となり、いわゆる過疎化現象を生起してきたことは周知のことである。広大なわが国の山間地で、小平地のあるところ、くまなく村落の立地をみていることは、まさに驚異に値する土地占居の姿といえよう。これは長い歴史的過程において成立をみたものであるが、高度経済成長はかような伝統的居住のパターンを一挙に改変せしめ

つつあるといえよう。そのエネルギーは驚くべき力をもっていたが、それはわが国の高度に発達した資本主義と、それを基盤において支えてきた石油エネルギー資源であったといつてよいであろう。石油ショック以後は一応改変も小休止である。かような経済的大変動のなかで、山村は壊滅化のプロセスを辿りつつも、なお自らの存立のため、英知と能力の限りを絞って、これに対応してきたといえる。ここでは、わが国の典型的山村といつてもよい白山麓の石川県白峰村(図1)について、この点を明らかにしてみたいと思う。

一、人口の減少―いわゆる過疎化

人口現象はその地域における諸現象の総合的表現といえようが、この点よりして白峰村の人口の推移をまずみることにしよう。図2は一八八八年(明治二十一年)以降の人口・戸数の推移を示したもの

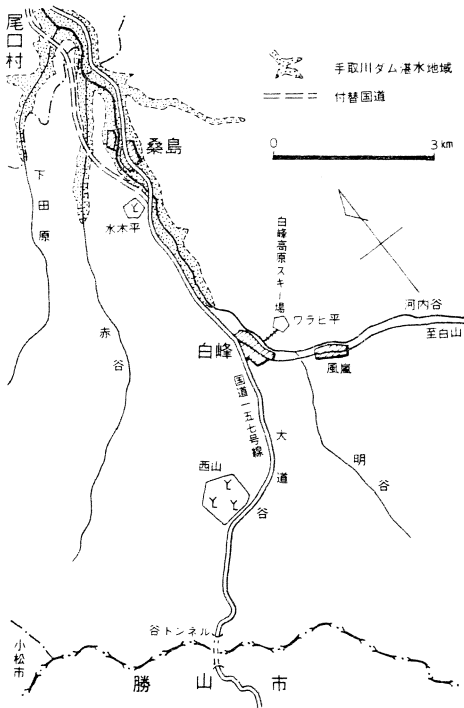


図1. 白峰村主要部図

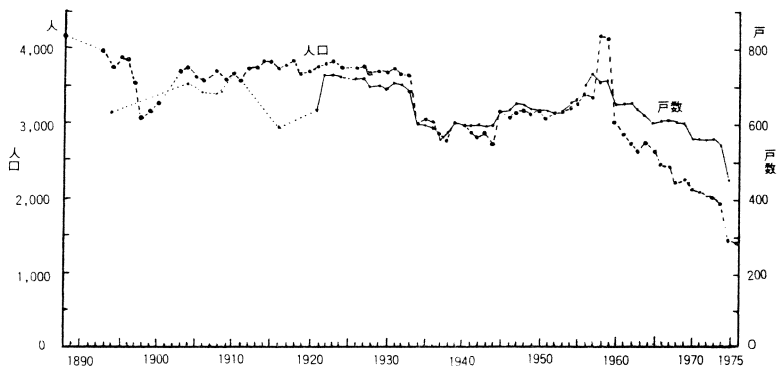


図2. 白峰村の人口・戸数の推移・【白峰村役場資料により作成】

表1 白峰村の産業別人口の推移

	総数	第1次	第2次	第3次
1920	1595 (100)	1032 (64.8)	334 (21.0)	229 (14.4)
1930	2273 (100)	1558 (68.5)	365 (16.1)	350 (15.4)
1950	1685 (100)	1007 (59.8)	438 (26.0)	240 (14.2)
1955	2693 (100)	740 (27.5)	1485 (55.1)	468 (17.4)
1960	1539 (100)	475 (30.9)	652 (42.4)	412 (26.8)
1965	1395 (100)	192 (13.8)	794 (56.9)	409 (29.3)
1970	1284 (100)	131 (10.2)	693 (54.0)	460 (35.8)

イタリック体は% (国勢調査結果による)

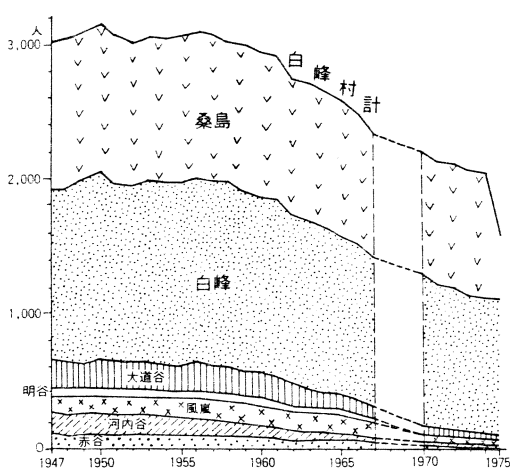


図3. 戦後における白峰村の集落別人口の推移
【白峰村配給台帳により作成】

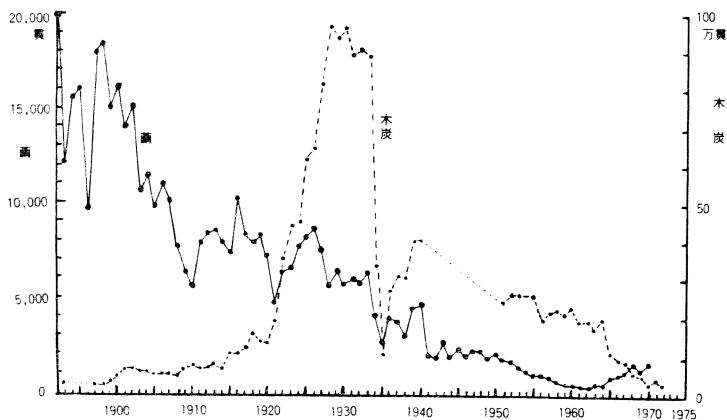


図4. 白峰村の薬・木炭生産量の推移【白峰村役場資料により作成】

である。白峰村の人口は一九三四年の^④手取川大水害を境に急減はするものの、この年以前はほぼ三・七〇〇人程度、この年以後は三・〇〇〇人位と、ほぼ安定した人口をもって一九六〇年代に至るが、一九五〇年代ではむしろ人口・戸数の増加傾向にあったことは注目してよい点である。

ところで、一九五〇年代末には一時人口は四、〇〇〇人台になったこともあるが、これは発電所建設工事などの一時的現象で、傾向としては人口・戸数ともに減少傾向を辿り、とくに近年は人口の減少が顕著になってきて、二、〇〇〇人を割るほどになっている。

白峰村は面積二二二平方キロメートルの広大な山村で、手取川の段丘上に位置する白峰を中心の大集落として、さらに下流の氾濫原に桑島の集村がある。あとは山腹の小平地に散村形態で立地する出作り集落より成立していた。図3で戦後の人口の推移をみると、白峰・桑島の二大集落の人口減少はさして著しくないのに対して、出作り地帯の赤谷^{あかたに}、河内谷^{こうちたに}、風嵐^{かざろし}、明谷^{みょうたに}、大道谷^{おみちたに}などの人口減少は顕著である。出作りの住民は村外へ転出するほかに、白峰・桑島の大集落へ集中移動しており、自然のうちに集落の再編成をしてきたわけである。ただ桑島の人口が最近激減したのは、目下建設中の手取川ダム工事^⑤（ダムサイトは下流の尾口村）により水没するため、離村した人口が多かったことによるものである。

かような人口の減少・移動現象を起した背景としての産業構造をつぎにみよう。

二、産業構造の変質

山村の常として、白峰村が農林業を主体としてきたことは、表1で明らかである。第一次産業人口は一九五〇年の国勢調査までは主軸をなしていたが、高度経済成長下の一九五五年には著減し、以後この傾向はますます著しくなり、かわって第二次産業人口が主体となってきた。まさに白峰村は産業面では変質を遂げてしまったわけである。

第一次産業 白峰村は出作りの山村として、古来著名であった^⑥が、現在、出作りは全く衰退し、僅かに数戸を残すのみである。出作りの農業は周知のように、自給用の雑穀作を主体とする焼畑農業と、現金収入源の中軸をなした養蚕とにあり、大正末期（一九二五）からは木炭がこれにとって替り、中心をなしてきた点は凶4で明らかである。ところが木炭は一九五五年を境に二〇万貫台下り、一九六五年からは一〇万貫となり、以後さらに急減を遂げている。一方、養蚕は一九六五年頃から伸びてき、繭は量的にはさして著しくないものの、漸増傾向を示している点は注目してよい点である。

繭から生産される生糸は、戦前のわが国で輸出の中軸をなすものであったが、アメリカへの生糸輸出の衰退から昭和以降退行していった。これは白峰村の山村経済の支柱をゆるがすものであった。ただ、一九二四年、白山砂防工事のため、車道が白峰まで完成されたので、軽量・高価の養蚕から高価の木炭生産に転じた。当時全国的に都市化が進み、都市人口の増加に伴い、主要家庭燃料として木炭の需要が増大するようになったのである。こうして養蚕から製炭へはスムーズに転向することができ、製炭業は養蚕業にかわって、白峰村の主要な第一次産業となったのである。そうした結果もあってか、白峰村の第一次産業別人口は一九二〇年に対して一九三〇年は

五二六人が増加した。

このあと一九三四年の大水害によって、白峰村の人口は著減、生産量も必然的に減少していった。天災を契機に人口が著減するのは、山村の一般的傾向で、生活環境の厳しさ、人口支持力の脆弱さとかがような際に具現したものと、いってよいであろう¹⁰。こうして一九五〇年の第一次産業別人口は千人台に減少してしまったが、なお一九二〇年にはほぼ匹敵する人口をもっていた。

このあと一九五五年において、第一次産業別人口は七四〇人となり、さらに急減を辿ることは表1に明示の通りである。わが国の過疎地には山村が多く含まれているものの、全国的には第一次産業はなお五〇・四％（一九七〇年）を占めて主体を構成しているのである¹¹が、白峰村は同年、一〇・二％を占めるに過ぎない。白峰村は第二・三次産業によって人口を支えているのであって、第一次産業の人口支持力は極度に弱まった山村といつてよいわけである。

第二次産業 奥地山村とはいえ、白峰村には明治初年すでに近代製糸工場の創設をみた点は特記に値しよう¹²。爾後、製糸工場に興亡はあったものの、第二次大戦に至るまで存続した。また製材業などの工場も、車道の開通に伴い発達した。白山には崩壊し易いジュラ紀の地層があり¹³、時に大洪水をおこしてきたので、治山治水上、砂防工事が半永久的に進められてきており、このため建設業の従事者が大正末期より増加した。戦後はさらに、電源開発工事、その他土木工事の発展に伴い建設業従事者は増大した。一九七〇年の建設業従事者は四一二人で、製造業の二四四人をはるかに上回っている。

ところで一九五〇年には建設業三一六人、製造業一二一人であつ

たが、一九七〇年と比較してみると、建設業従事者の伸びが停滞的であるのに対して、製造業従事者は倍増している点は注意してよい。奥地山村とはいえ、製造業は就業者を増大させる可能性をもつているともみられるのである。

第三次産業 第三次産業の就業者は漸増の傾向にあり、近年は約三分の一強の比率を占めている。このなかでサービス業従事者が半数強となっているほかは、商業・運輸通信業従事者が約四分の一を占めている。総人口の減少傾向にもかかわらず、第三次産業人口は漸増しつつあることも注目し値する。

三、新産業の模索(一) — 伝統的産業 —

山村の退行 白峰村はいわゆる「過疎地域」の指定を受けてはいないが、一九六〇年を契機にして、人口の急減傾向を示すことは図1の通りで、わが国経済の高度成長と符節を合している。

出作りで全国的に著名な白峰村は、貧村ではなく、約一八〇〇ペーシの白峰村史¹⁵上下二巻を刊行しうる実力をもった山村で、一九五七年より五か年の歳月をかけ、多大のスタッフを動員し、一九六二年元旦に刊行、完成した。この村史が高度経済成長の転機直前に編纂刊行されたことは、時宜を得たものといえよう。人口減少の著しい現在では、実態調査の対象すら消滅しているわけで、もし編纂するとすれば困難を極めたであろうと推察される。ただし、村史編纂後の白峰村の衰退、変質には極めて顕著なものがあり、とくに前述のように第一次産業の比重は極度に低下してしまっている。かような現況に対して村当局は、この山村の振興に多大の労力を傾注し

て今日に至っている。以下でこの実態をみることにしよう。

山村の振興 過疎防止というとき、まずいわれることは「快適な生活環境づくり」であり、これとともに「地域の特性を生かした産業の振興」が提唱された¹⁶。これは「経済成長」から「福祉優先」への転換を示すもので、全国的な政策としては当然すぎることであった。しかし、山村においては両者の比重はむしろ逆であると考えるものである。もちろん社会福祉を増進することは欠かせないが、その前提としての山村経済の振興がまず必要であったのである¹⁷。これが欠けていたことが人口流出を著しく促進したわけである。すなわち、高度経済成長に伴い、山村には生活を支える経済的基盤が崩壊もしくは消滅していったわけである。これに対する国の行政は、これまでの「過疎白書」¹⁶¹⁸がよく示している。しかし、現地の山村ではかような施策にかかわらず、その地域に必ずする対策をいろいろと実施した。それはまさに行政がいうところの「市町村が主体的で創意に満ちた計画に基づいて事業を実施」してきたものであったのである。

米作 白峰村の水田は五ヘクタール、収量一六トン（一九七四）で、一〇アール当たり収量三三〇キログラムは、県平均の四九〇キログラムをはるかに下回り、県下最低である。下流の手取川扇状地に位する松任市の五五一キログラムと比較すると差はさらに著しい。白峰村の水田は元来稗田で、出作り地にもみられた。これらが稲作に転換するのは戦後の一九五〇年ころからであった¹⁹。稲作は主農業ではないが、一九七〇年からは一〇ヘクタールから五ヘクタールの減反に至った。

養蚕 白峰村の一般村民にとって、養蚕業は現金収入の主要部を構成していた。前述のようにその比重は低下してきたものの、一九〇年養蚕農家はなお一六〇戸を数えた。爾後、養蚕戸数は漸減し、一九六〇年には三三戸、一九六五年には二七戸に減じた。ただし収量は一九六二年の二、七〇三キログラムを最低として、あと上向き、一九七〇年には六、一九三キログラムにまで増大した。高度経済成長に伴う生糸需要の増大から、養蚕業は再び見直され、白峰村においても増収への努力が払われてきたのである。その実績をつぎにみよう。

一九六〇年には、養蚕先進地の岐阜県大野郡朝日村を視察した。そして屋外条桑育、養蚕所を設け、桑園造成（三ヘクタール）や養蚕グループ結成（白峰・ワラビ平）による共同飼育を行なった。これは白峰村の養蚕振興の基礎となったものである。

翌一九六一年には画期的な事業として、桑島農協が水木平地区に集団桑園三ヘクタールを設け、飼育所を建設した。ここに婦女二〇名、男六名を雇用し、企業的養蚕を開始した。桑園は一九六三年七ヘクタール、一九六七年一〇ヘクタールに拡張した。春・夏・秋・晩秋蚕の四回を飼育し、一九六七年には二、一七五キログラムの収量を挙げ、計画を上回った。給桑は一日一回と養蚕技術は省力化され、悩みであった違蚕を克服して養蚕を安定産業とした。また高地にあることから桑が晩霜や、ヒョウの災害を受けることもあったが、経営は順調に進展していった。各種の補助金を得て事業は進められたが、桑島農協の情熱的事業である点に意義がある。また類似の自然条件にある積雪寒冷地の養蚕地として、長野県諏訪郡原村を視察もした。

表2 白峰県営農地開発地における養蚕経営

	収 繭 量	収 入	支 出	差 引
	kg	千円	千円	千円
1966~69			16,740	△16,740
1970	629	760	11,244	△10,484
1971	1,485	1,428	15,403	△13,975
1972	2,274	2,728	16,167	△13,439
1973	2,912	5,094	12,540	△7,446
1974	3,163	4,183	18,237	△14,053
計	10,463	14,193	90,331	△76,137

(石川県資料による)

このようにして養蚕は飛躍の見通しが立ったが、一九六三年は未曾有の豪雪で、出作りの養蚕農家の家屋が倒壊し、打撃を受けたものの、ワラビ平。水木平の養蚕事業は進展した。そして一九六五年には養蚕を白峰村最大の産業と目し、石川県農業試験場が水木平において近代的省力養蚕の飼育試験を実施したほどであった。

また同年、さらに大道谷の西山地区に白峰県営農地開発事業計画が樹てられ、一九六六年より着工された。これは養蚕を面的に推進するものであり、なお大道谷住民の生活安定を計り、離村防止をも目的としたものである。事業は約一億円の資金で山腹に桑園約七〇ヘクタールを開き、稚蚕共同飼育所、壮蚕共同飼育所などを設けた。なお一九六六年には初めて晩々秋

蚕の飼育が行なわれた。

西山の養蚕事業は村営で行なわれ、一九七〇年より収繭をみ、桑園の拡張とともに収繭量もまた表2のように増加をみた。しかし、その収支は償わず、現在村当局はその処置に苦慮している現状である。その原因には種々あるが、この地区内に一九六八年地じりが一三ヘクタール生じ、規模を縮小したため国庫補助率が低下し、また糸況が低迷している一方、雇用者七ないし八名の人件費が著しく増大したことが挙げられる。また現在までに桑園は四〇ヘク

タールを開いたが、これは毎年開拓したもので、当初一筆に事業を進めなかったことも不利とされている。また地味も必ずしも豊かではなかった。養蚕は継続しているものの、一部地区にギンナンを植栽するなどし、営農の見直しをしている状態である。養蚕は古来白峰村の伝統的な産業であり、戦後においても、前述のように近年漸増の傾向にあった。しかし、白峰村は建設業が盛行し、一人当り年間三〇〇万円の賃金収入が見込まれている。したがってこれに見合う養蚕経営は、かなり合理的・省力的経営をしなくては成立しないと考えられ、結局増大する人件費の圧迫により、この事業も停滞している現状である。

畜産 白峰村が力点を注いで振興を計ったものに畜産があった。しかし、これは相当の努力にもかかわらず、結局、不成功に終わった。その経過を概観すると、一九五七年に乳牛・和牛計九頭を導入、出作り農家に飼育させたが、半数が越冬できなかったという。しかし一九六〇年には一五名が畜産グループを結成し、有畜傾斜地農家のモデルとなることを目的に、牧野を開き、和牛の放牧飼育を行なった。そして寒冷地用国有貸付牛一セット(二〇頭)の委託をうけ、五ヘクタールの高度集約牧野を造成した。この年より畜産振興が本格的に進められたのである。

このあと牛の導入はさらに進み、一九六一年に県貸付牛一セット(牝一〇頭)のほか一四六頭、翌年は八六頭、同六三年七頭、同六四年一八頭を導入した。この間、仔牛を生産し販売もしたが、前述のように結果は不成功に終わった。一九六五年、過去五年間旺盛な開拓精神をもって涙ぐましい努力を続けてきた二協業体が事業停止に至ったの

である。その理由としては四点が考えられた²⁰。すなわち、①和牛のみの完全協業経営は全国的にも稀で、高度な技術と適格な指導が必要であったがこれを欠いていた。②和牛の流通機構の改善が放置されていた。③牧野造成・畜舎建設・機械導入などに多額の投資が行なわれ、短期間に経営規模を拡大しすぎた。④肥育素牛の育成、若令肥育の経営が通ずると思われたが、繁殖牝牛の多頭導入で、冬季飼育に費用がかさみ、かつ仔牛生産の成績が悪く、負債が増加し、経営の見透しが立たなくなった。以上が不成功の要因とされるものである。

元来、白峰村は畜産地ではなかった。かつては手取川扇状地農村より、耕馬を五月から十一月上旬まであずかり、出作りで飼養して厩肥を生産することが、一部の出作り農家で行なわれていた程度であった²¹。かようなところへの畜産の導入は困難性があつたと思われるものの、広大な山地利用の面で、適切と考えられた畜産の不成功は、残念なことといつてよいであろう。

林業 杉の植栽、シイタケ・ナメコ栽培などが行なわれているものの、これが人口支持力を大にするほどのものでもなかった。

四 新産業の模索(二) 近代産業

道路交通の改善 奥地の山村とはいえ、白峰村に製糸業が古くより発達したことは前述した。また紬織・木工などの家内工業や製材・茸缶詰工業もみられた。高度経済成長の過程で、近代的な工場への導入は、山村においてもまた希求するものであつたが、適切な工業立地条件を具備しない山村への工場進出はごく稀であつたといえよう。ところで、近代的諸産業の導入に当たっては、交通の改善がとく

に重要であつた。前述のように元来交通条件に恵まれず、その改善を切望してきた白峰村であつたが、高度経済成長下において、幹線の国道一五七号線が一九六二年より舗装を始め、一九七〇年に一応完了した。さらに福井県勝山に抜ける国道の谷トンネル(二車線、長さ二、四六三メートル)が新しく一九六九年に起工し、一九七一年に完成した。

一方、白峰村は積雪三メートルにも及ぶ深雪地帯で、冬季は交通杜絶であつたが、一九六五年以降、機械除雪が進み、大体二車線を確保することになり、通年自動車交通が可能となつた。こうして白峰村の交通条件は一変し、平地村と同一の交通条件に至つたといつても過言ではない。近代産業の導入もかような条件下で具現するようになったのである。

工業 伝統の紬織を近代化した工場(織工一〇人、織機二〇台)が一九七一年より桑島で創業した。またレース工場(従業員二〇人)が一九六八年、石川県寺井町より白峰に進出した。これらは山村婦人に就業の場を与えた。一九七四年には工場再配置促進法の適用工場として、東京よりゴム加工工場が進出し、従業員一〇人を採用した。この工場は海水帽、ゴム輪などを加工する異色の工場であるが、営業成績はよく、従業員を三〇人に増員したいものの、採用困難の実状である。山村振興のため工場誘致は一つの有力な方途ではあるが、地元山村の人口規模の小さい点は、工場拡張に際して、すぐさま従業員確保を困難にするほど底の浅いものであることは問題である。また、とかく進出工場が婦人労働力に依存する企業であることも注意すべき点といえよう。また事業所統計によれば製造業の従業員

者数は一〇〇〜二〇〇人程度で、白峰村の全従業者数からすれば一五%前後に過ぎない。

ところで、高度経済成長は砂利の利用を著しくし、手取川での砂利採取が発展した。これまで砂利はとくに下流の扇状地地域の河床で採取されたが、一九七一年鶴来町より下流での採取が禁止されてから、上流部での採取が進んだ。そして、ついに白峰地籍にまで採取が及び、大型ダンプカーが国道を疾駆する現況である²²⁾。

一方、建設従業者は三〇〇〜四〇〇人と多く、製造業従業者の倍以上で、全従業者の三五%程度から、一九七五年には四四%にまで達し、白峰村第一の産業にのし上がった。山村における建設業の進展は高度経済成長下の著しい特色で、手取川流域の山村において、建設業出身の村長・県会議員などの多くみられる点は注目に値する²³⁾。白峰村において建設業者は零細企業ではあるが、一〇社を越えている。前述のように白山砂防工事のため、白峰村には車道が通じ、製炭とともに出作りの退行に伴う土建業従業者の増大がみられたが、電源開発による一時的な土建業の発展を含めて、建設業の地位は重要である。しかも、冬季の工事中止期間は三か月、収入の約六割に当たる雇用保険の給付をうけることによって、生活は安定的となる。一九七五年度白峰村の冬季解雇者は二五一名に上り、隣村を上回っている。古くは冬季間の過剰労力が牛首乞食²⁴⁾として福井・関西方面へ流出したことを思うと全く隔世の感がある。

観光業 高度経済成長下の多くの山村にとって、観光業は新しい魅力的な産業となりつつある。豊かな自然と交通の近代化とは、余暇利用の国民的要請にマッチして、山村に新しい産業をもたらした

わけである。ところで白峰村には全国に二、七〇〇余の末社をもつ白山比咩^{しんがま}(鶴来町)の奥宮が白山頂に鎮座する。白山は古来、信仰の山として日本三名山の一つに数えられ、参詣者の道案内などで山麓の村はうるおう面もあった模様である。明治以降は白山登山者が夏に集中し、白峰村は主要な登山路に当たり、登山者を迎え入れてきた。しかし、白山信仰が麓の白峰村の集落を維持するほどに参詣者を確保してきたわけではなかった。

観光業が新産業として発展するのは全く近年のことで、それは一九七一年より始まる村営白峰高原スキー場の開設からである。これは四、五〇〇平方メートルのワラビ平の旧牧場(村有地、標高一、〇三二メートル)の斜面に、約三億円を投じて建設したものである。スキー場の開設計画は一〇年前よりあったが、手取川下流の既設スキー場とともに、白山麓スキー場群の一つとして、発足したわけである。

スキー場は常時二五人の従業員を雇い、既存の旅館六軒で約三〇〇名収容するほか、新設の民宿一〇軒で二〇〇名を収容可能である。一九七三年は雪が少なかったが、三、〇〇〇人宿泊し、翌年は豪雪で交通障害をうけ、降雪の不足・過剰がともに利用上影響した。それでもスキー客は三万余を受入れてきた(表3)。村にとって経営は決して順調ではなく、村財政を苦しめもしたが、一九七六年にはリフト一基を増設もし、一応軌道にのっている現状である。来客は石川県の人を主体としたが、県下からも、谷峠

表3 白峰高原スキー場利用者数(万人)

	日帰客	宿泊客	計
1972	2.6	0.3	2.9
73	3.0	0.3	3.3
74	3.3	0.4	3.7
75	3.0	0.4	3.4

(石川県観光物産課資料による)

越えの福井県からも、最奥のスキー場に当たる点で、マイナスの面は否めない。

さらに一九七二年には農林省の自然休養村の指定をうけ、山菜採取園・高山植物花木園・キャンプ場・バンガローや自然休養センターを設け、自然・文化遺産・風俗などもふくめ、村全域にレクリエーション施設を建設する計画である。なおこの計画とあわせ、県単事業としてのレクリエーション施設計画もあるが、両者は水没桑島の残村民の生活安定をも計る目的で計画を進めている。

白峰村は白山を中心として地質・動植物面で特色²⁵⁾をもち、また出作り・焼畑耕作は文化的価値も高い²⁶⁾。その民家・民具のほかに、焼畑・キャーチ(常畑)と出作り小屋などを一セットにした保存が極めて文化的価値があると思われる。また民謡・踊などユニークなものにも富む。山村生活の実態を知る貴重な地域であり、これらを保存し、訪客の利用を計ることは極めて価値あるものと信ずる。それが山村民の定住にプラスすることを期待するものであるが、それは今後の課題といえようし、過度の観光客の来訪はまた別の問題を生ずることにもなる。現に白山登山者数は自然保護の面からは過大とみられてもいる。しかし、山村の適切なレクリエーション化は、山村の持続と国民の肉体的、精神的保健のために、ともに重要性をもつものであり、白峰村のこの面での今後の開発は大きな課題である。

通勤 白峰村内における就業の場には限度があるので、村外に就業の場を求め、通勤することは一つの方向でもある。高度経済成長において、わが国土の道路整備の進展には目を見張るものがあったが、白峰村の道路整備・除雪対策も前述のように顕著なものがあった。

表4 白峰村における諸車の推移

	自動車										自 転 車	リ ヤ カ ー	荷 馬 車	荷 車	
	貨物車			バ ス	乗用車			特 殊 車 *	そ の 他	小 型 ・ 軽 二 輪 車 **					計
	普 通	小 型	軽		普 通	小 型	軽								
1952		8				4	3	—		15	142	5	3	32	
1955		9		4		1	—	15		29	373	5	1	27	
1958		5		4		1	2	23		35	449	10	1	26	
1962	14	15		6	3	29		183		250					
1966	40	68	15	9	2	41	8	1		184					
1968	57	84	24	11	3	73	8	11		47	318				
1972	49	141	50	10	2	186	62	19		18	537				
1975	56	184	24	12	3	343	20	24		5	671				

*特殊車・特殊用途車， **小型・軽二輪車(石川県市町村勢要覧による)

表5 白峰村における就業者の動向

			1965	1970
白峰村の 居住者	総 数		1395	1284
	従業地	村内	1376	1258
		県内外	17	26①
白峰村での 従業者	総 数		1457	1406
	居住地	村内	1376	1258③
		県内外	63	148④
			18②	52⑤

- 注 ①うち14名が鶴来町で従業。
 ②計81名のうち建設業34、電気・ガス・水道業10。
 ③うち自宅261、自宅外997。
 ④建設業73、サービス業21、尾口村より42、鳥越村より20、金沢市より12が従業。
 ⑤福井市より47、勝山市より40。

(国勢調査報告による)

これは当然に自動車の普及を招集するものであった。表4はその実情を示すものであるが、従来の自転車に対し、一九六〇年代にモーターゼーションが進展し、小型乗用車のほか貨物車の普及も著しく、逆に小型・軽二輪車は漸減傾向にある。公共交通機関の普及の乏しい山村において、家用車輛の普及は産業・生活上において大きな意義をもち、場合によっては必需品とも称してよいと思う。

一方、バス交通も発達し、すでに一九二四年より鉄道乗継で鶴来や金沢方面へ乗合自動車を通じ、福井県勝山へは谷トンネル開通後の一九五一年にバスが運行され始めた。

ところで、現在、自動車・バスの走行は著しく時間短縮されている。しかし、金沢への走行には自動車で一時間二〇分、バスで二時間七分を要し、一日三往復するに過ぎない。また途中の鶴来町へもバスで一時間二分を要するほどである。したがって、これら都市への通勤は困難を伴っている。現に手取川筋において、尾口村は通

勤者を見、一九六五年において金沢・鶴来・吉野谷へ七七名(総数一一二名のうち)の村外就業者があった。ところが白峰村においては一七名と極めて乏しい。モーターゼーションの進んだ一九七〇年においても、二六名にすぎず(表5)、白峰村はこの面ではなお遠隔性を留めた奥地山村といつてよいであろう。表5でも明らかのように、むしろ、建設業を主体に白峰村への村外就業者の流入が目立っているくらいである。

まとめ 以上、白峰村における産業の動向を概観した。高度経済成長下の奥地山村として、人口流出を防止するため、村当局は国・県の各種振興策・補助事業などを地域の実態に合せて採り入れ、また村独自の事業をも積極的に推進してきたといえよう。その涙ぐましい努力にかかわらず、わが国の産業・経済の大きな潮流は白峰村の人口を、とくに青少年人口を流出させて止まなかったのである。

五 人口増加と新転期

人口増加の対策 最近の山村は一般に人口支持力が著しく低下しているが、山村に稀少な人口が定住し、高い生活水準を維持して豊かな生活をする方途は一つの方向と思う。しかし、一般には人口増加への期待が大きく、その対策に苦心している山村が多い。白峰村もまたかような方向で努力しつつある。すなわち、白峰村ではまず前述のように、地元産業を振興し、人口の定着に努力してきた。さらに村当局は人口増の方策として一九六八年より出生第一・二子に各三千円、第三子に一万円の出産祝を送った。翌年はさらに第三子以下に満十八才まで、養育費補助として月、第三子百円、第四子二

百円、第五子以下三百円を支出することを決め、また次男以下の村内所帯者の新築に際しては、新築祝三万円を送ることを決めるなどの対策をとった。かような諸対策は無意味ではないが、積極的に人口の定着を増進する有力な役割を担うとはいえないものである。

人口定着の隘路 さらに白峰村の人口が老令化しつつある現状に對して、若年層を定着させることは大きな課題といえよう。しかしそこには種々の隘路があると考えられる。以下この点を考察してみよう。

第一には地元山村に就職の場のないことである。白峰村は第一次産業の比重の低下した山村ではあるが、前述の農林業に若年層をひきとめるだけの力はないし、第二次産業といっても中年層婦人を主体とするもので、とくに若年男子の就労の場を欠いている実状である。第三次産業には各種の職場があるものの、交通運輸関係が伸びつつあるほかは、役場・学校・郵便局・農協その他恒常的勤務の職場は望ましいものではないが、収容力に限りがあり、さらに人口減少に伴いその定員数もまた減少している。結局は白峰村の広大な山地をいかに開發して人口支持力を高めるかが問題となるであろう。

第二に山村においてはたとえ就職の場があったとしても、職種が限定され、職業選択の自由がない。とくに高校進学が高まり、一九七五年、中学卒業者二四名中高校進学者二一名、同七六年には二六名中二四名で、いずれも下宿している。ちなみに一九六九年には四七名中二二名が進学で半数以下であった。村内に高校をもたぬ白峰村においては、村出身の高卒者に対して、多様な就職の場を用意するほどの諸事業所をもってはいないのである。都会に一度就職し、い

わゆるUターンする若年者も無いわけではないが、これが人口減少傾向を逆転させるまでにはなっていない。しかし、将来Uターン者の職場が用意され、かような傾向が発展し、都市と山村の人口交流が活発化して、山村への人口の反流と定住が増大することは期待したいところである。

第三に白峰村を地方中心都市への通勤可能圏に入れることは、村内への人口定住の有力な施策と考えられる。このため国道整備の意義は大きい。前述のように金沢への通勤圏外にあることは不利で、人口流出が著しい⁽⁷⁾。ダム水没による付替国道が完成した場合、通勤時間のある程度の短縮は期待されよう。他方、鶴来や勝山の都市的機能を拡充し、ここへの通勤圏に入れることも重要である。

以上の諸方策によって人口が白峰村に定着し増加するようになれば、当然に白峰村内での社会福祉諸施設も整えられてき、相応に生活をエンジョイすることができるようになると考えられる。

新転換期 激しい高度経済成長の荒波はいわゆる石油ショックによって、一応終熄をした。約二〇年間に亘る山村の激甚な変動もここに停滞をし、新たな段階を迎えるに至った。白峰村とてもこの点は変りがない。いわゆる経済の低成長下において、白峰村の人口流出もまた今後、停滞傾向にむかうものと思われる。白峰村は全国的経済動向のなかで転換期を迎えつつあるが、なおつぎの地域的条件も加わって一大転換期にあるとみられる。

それは前述の手取川ダムの計画で、白峰村の大集村桑島が水没し、白峰の段丘崖下までダム湖が湛水することになっている。このため桑島は二三四戸のうち残村戸数は六〇戸で、僅か二六%に過ぎない。

離村者は集団移住地として金沢へ二二戸、鶴来町へ五八戸があり、これらを含めて金沢へ六〇戸、鶴来へ八七戸、その他野々市・松任・小松などの金沢平野部へほとんどが移住した。集団移住者は袖工場を新設（鶴来町）し働く者と、白峰村内での土建業。砂利採取業に集団通勤するものとがみられる。一方、残村者は新しく国道添いに集落を移動する運びで目下工事中であるが、桑島集落の人口著減により、白峰村は常住人口一、三七六人（一九七六年八月一日）の山村と化した。全国的な経済動向と、ダム建設という地域事情のもとで、小山村化した白峰村は現在、新たな段階に入りつつあるわけである。

ところで、手取川ダム建設に伴い、石川県は地域振興計画を策定し約二五〇億円の事業費を予定している。この時点で白峰村が、村民生活を恒久的に維持発展できる、いかなる方途を見出すかは極めて大きな課題といつてよいであろう。一九七四年、地元側の白山麓五か村は広域行政推進協議会を設け、とくに農業振興を計画している。農業の近代化を進める一面、作目にも工夫をこらし、イチゴ・花卉・シヤクナゲ・山菜の栽培、酪農、養蚕、タバコ、果実酒、薬草などの産地化を考えている。その一部はすでに行なわれており、白峰村ではシヤクナゲ・山菜・養蚕・ナメコなどが主要生産物となっていることは前述の通りである。手取川溪谷は現在重要な転換期にあるわけので、この機会にいかなる村造りをするか、重要な時点にあると思われる。

むすび

白峰村は高度経済成長を迎えるまで、比較的安定した人口を支持

してきた。しかし高度経済成長期になり、山村の産業は退行し、人口減少が著しくなった。一方、山村民が多年渴望してきた道路の近代化はこの時点で進み、モータリゼーションも急進展した。

かような情勢に対応するため、白峰村民は自発的に養蚕・畜産・林業などの伝統的産業や、工業・観光業などの近代的産業の発展を意欲的に進めてきた。しかし、前者には大きな成果は見られず、後者によっても人口を充分に定着させることはできないでいる。

人口定着のため村は出生祝金などを支給しているが、とくに若年層の定着には隘路がある。それは就職の場が乏しいこと、職業選択の自由のないこと、そして通勤不能の遠隔地にあることなどに示される。さらに現在、ダム建設により人口は著減し、村は転換期にある。人口増加はなかなか実現しにくい現在、一つの方向として現人口をもとに、安定的で豊かな山村の建設の方途を考えていくことが必要といえよう。このためにも、今後は広大な山地の利用を地元山村民と全国民全般とのために役立てることが肝要と考えられる。

本稿をまとめるにあたり、石川県庁・白峰村役場その他官庁より資料の提供を受け、多くの白峰村の人びとより貴重な教示を戴いた。また白峰村教育委員の織田日出夫氏には何回も現地を案内していただき、多くの示唆を与えられた。併せて深謝の意を表するものである。

注

① 矢ヶ崎孝雄 小矢部川上流の山村―農村より山村への移行につ

いて― 金沢大学教育学部紀要 第二号 一九五四 四二頁

② 最近、山村の定義をまとめたものとしてつぎの論文がある。

田畑久夫 わが国における山村研究の学譜とその問題点―木地屋のムラの場合― 人文地理 第二七巻 第四号 一九七五 四六―五〇頁

③ 矢ヶ崎孝雄 白山麓白峰村の歩荷―山村と担夫交通― 金沢大学教育学部紀要 第八号 一九六〇 八八頁

④ 石川県 昭和九年石川県水害誌 一九三五

⑤ 手取川ダムは高さ一五三メートルのロックフィルダムで、一・九億立方メートルの有効貯水量をもつ。これによって約三七万キロワットの発電、金沢平野八三万人に一日最大三九万トンを給水、一日最大二〇万トンの工業用水を確保し、毎秒八〇〇トンの洪水調節をする計画である。電源開発、北陸電力、石川県が共同で推進している。

⑥ 田中啓爾、幸田清喜 白山山麓に於ける出作地帯 地理学評論 第三巻 第三・四号 一九二七

⑦ 加藤助参 白山山麓に於ける出作の研究 京大農業経済論集 第一輯 一九三五

⑧ 幸田清喜 白山麓白峰村 地域 第一巻 第一号 一九五二

同 白峰の出作り 現代地理講座 第二巻 一九五六

⑨ 佐々木高明 日本の焼畑 古今書院 一九七二

⑩ 坂口慶治 京都近郊山地における廃村化の機構と要因 人文地理 第二七巻 第六号 一九七五 二―三頁

⑪ 国土庁地方振興局過疎対策室 過疎対策の現況 一九七五 一六頁

⑫ 矢ヶ崎孝雄 白山麓白峰村における明治大正期製糸業の変貌

歴史地理学紀要 二 一九六〇

⑬ 小林貞一 白山をめぐる地域の地質

⑭ 矢ヶ崎孝雄 白山麓白峰村の歩荷―山村と担夫交通― 金沢大学教育学部紀要 第八号 一九六〇 一〇―一頁

⑮ 白峰村史編集委員会 白峰村史 上巻 一九六二 下巻 一九五九

⑯ 自治大臣官房過疎対策管理室 過疎地域の現状と対策 一九七二 二―二〇七頁

同 過疎対策の現況 一九七三 一四八頁

⑰ 矢ヶ崎孝雄・北林吉弘 山村の変貌と山地の土地利用(一九七四年度秋季大会シンポジウム) 地理学評論 第四八巻 第三号 一九七五 二一―七頁

⑱ 前掲⑪ 一六一頁―一六六頁

⑲ 石川県立郷土資料館 白山麓 一九七三 三二頁

⑳ 白峰村事務報告書 一九六五

㉑ 藤部与三氏

㉒ 石川県 石川県史 現代編(4) 一九五二 四一―一頁

㉓ 鳥越村史編纂委員会 石川県鳥越村史 一九七二 七一―〇頁

㉔ 新光社 日本地理風俗大系 第七巻 一九三〇 二〇―三頁

㉕ 日本自然保護協会中部支部・白山学術調査団 白山の自然 一九七〇

㉖ 前掲⑩

㉗ 矢ヶ崎孝雄 農村の人口移動 地理 第一九巻 第一一―一頁 一九七四 四三頁

Shiramine Village at the foot of Mt. Haku-san
-Its accommodation to the high economic growth-

Takao Yagasaki

The high economic growth since 1960 has caused a decline in industry and a remarkable decrease in population of mountain villages in Japan. This is a report about the conditions and the accommodation to the high economic growth of a typical mountain village, Shiramine-mura, in Ishikawa Prefecture.

The staple industry of the village, hitherto changing from sericulture to charcoal making, have declined completely, which led to the decrease of the population; while the roads have been modernised with a rapid motorization. Earnest encouragement of sericulture, stockraising, forestry etc. to fix the population in the village has been rewarded only with some progress in industry and sightseeing. It cannot detain youths because it does not have proper employment, free choice of their callings and enough means of commuting to neighboring cities or towns.

Now the population is decreasing further on account of construction of dams. It stands on the turning point, where it seems very important not only for the villagers but for the whole nation to develop the vast mountain areas.